



この小襖は以下のとおり展示されます。

明治天皇百年祭記念
第二回「明治天皇六大巡幸」展
(平成25年10月12日～11月24日)
明治神宮文化館 宝物展示室
(東京都渋谷区代々木神園町1-1)
にて展示

御花御殿は御常御殿の北側にあって、東宮や親王の御殿とされました。北・東・南の三方を縁座敷に囲まれて四部屋が田の字のように並んでいる書院造りの御殿です。

四室のうち、南東にある部屋を上の間と呼び、その南側の床の間横にある袋棚に小襖8枚があります。上の段に「^{うちゅうさぎ}雨中鷺」、下の段には、「^{せっちゅうからす}雪中鳥」が画かれており、^{しやうえい}絵師は狩野正栄で寛政度の内裏でのものが現存しています。



<雨中鷺>



<雪中鳥>

明治天皇は、六大巡幸の第4回目、明治13年(1880)6・7月山梨三重両県・京都府巡幸の際に京都御所に滞在されましたが、『明治天皇紀』7月19日の条によれば「花御殿袋棚の小襖に雨中柳鷺の図を描けり、狩野正栄の筆なり、天皇深く之れを賞鑑し、池原香穉をして^{りんも}臨摹せしめたまふ」とあります。

^{てんと}東京奠都から10年余り、以前過ごされていた京都御所内を回り、この小襖をご覧になり、巡幸に同行していた国学者の池原香穉御用掛に模写を命じられたものです。

— 京都御所・修学院離宮 —

はなぐるま 花車

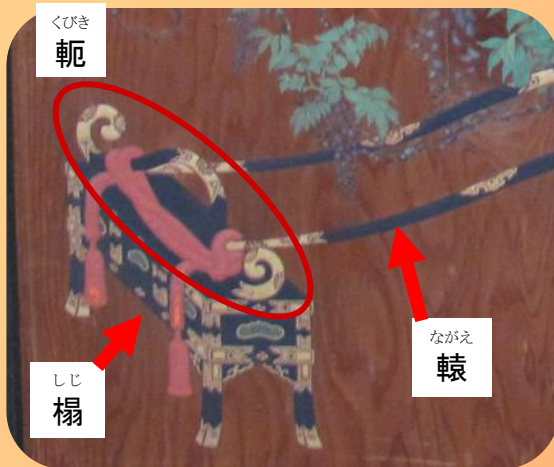


さきに輿について触れましたが、ここでは車を画いた杉戸について解説します。

京都御所には、籠に大きく盛った花を載せる「花車」を主題にした杉戸絵が2件あり、そのうちのひとつは吉田公均こうきんが画いた「春夏花車図」です。

(写真: 左)

荷台の竹籠には牡丹や藤など春と夏の草花がながえたくさん盛られており、轆ながえ (荷台から2本平行に前方へ伸びた棒)の先に渡した横木のくびき しじ 軛くびき は榻しじと呼ばれる台に載せられ、その轆や榻などには装飾が施された様子が画かれています。(詳細写真: 中段)



この杉戸は、元々御学問所の北御縁座敷きたごえんざしきにありましたが、御学問所と御常御殿をつなぐ奥新廊下 (写真: 下段左側) が、第二次世界大戦に伴う建物疎開で取り払われたため、杉戸としての役目がなくなり、現在は収蔵庫にて保存しています。



御学問所付近の写真(京都事務所保有のガラス乾板より)



現在の御学問所付近の写真

うまひこ おはなごてん

もうひとつの杉戸は、星野馬彦が御花御殿の東御縁座敷に「花車」と題し、朝顔や菊など夏と秋の様々な草花が盛られた籠を乗せた車を画いています。(写真: 右側)



御花御殿



杉戸の他にも花車の意匠の飾り金物があります。

中段右側の写真の飾り金物は、修学院離宮の中離宮にある客殿の釘隠で、車には牡丹、椿や菖蒲が七宝で彩られています。(客殿は天和2年(1682)に東福門院御所の奥対面所を移築したものです)

くぎかくし

しっぽう



修学院離宮・中離宮 客殿



京都御所の収蔵庫で保存している釘隠

下の写真の襖絵は「花車」とは題されてはいませんが、[葉其](#)の二で紹介した京都御所若宮御殿の「唐子遊」(画: 栢友篤)にも、子供が引いている大きな花車が画かれています。

からこあそび

かしわゆりどく



《京都》御所と離宮の栞（おり）



其の十一

— 京都御所 —

円山派の絵師が画いた「鶴」



おはなごてん
御花御殿上の間北側

おうきよ
円山派は円山応挙を祖とし、写生画や西洋の遠近法を研究して独自の画風で活躍した流派です。京都御所の安政度御造営の折に、円山派として同時期に活躍した二人の絵師が、鶴に関する障壁画を画いています。（応挙の障壁画は栞[其の九](#)で紹介）

らいしやう 一人は中島来章で、おはなごてん 御花御殿上の間に「群鶴松梅」という題材で障壁画を15面画いています。（御花御殿は御常御殿や御涼所などの北側にあり、皇太子のお住まいなどに充てられた御殿）

おうずい 来章は円山応瑞（円山派2代目・応挙の長男）に師事して幕末から明治初期にかけて活躍した絵師で、せい 四条派の横山清暉、ぶんりん 塩川文麟（[栞其の六](#)で紹介）、れんざん 岸派の岸連山（今後紹介予定）と共に「平安四名家」と称されました。

安政度御造営の折に、来章は「群鶴松梅」の他にも障壁画を担当しています。（詳細は次頁別表）



御花御殿上の間西側

もう一人は多村拳秀で、若宮御殿二の間に「梅に鶴」という題材で障壁画を16面画いています。(若宮御殿は、京都御所内の北側にあり、皇子が使用した建物で、明治天皇も幼少の頃使用されました)

前頁に挙げた平安四名家と称された人物達ほど評価は高くなかった拳秀ではありませんが、画家として一定の評価を得ていたことは、『平安人物志』(江戸時代に発行された京都の様々な文化に関する人名録)に文政13年(1830)版から慶応3年(1867)版に名前があったり、安政3年の『平安画家評判記』(番付形式で当時の画家の評価を記す)に記載されていることから分かります。



わかみやごてん
若宮御殿二の間西側



若宮御殿二の間南側

平安画家評判記	
順位	人物
1	がんだい 岸 岱
2	かのうえい 狩野永岳
3	よしかよ 横山清暉
4	なかしま 中島来章
5	かんだい 岸連山
9	しほ川文麟
40	たむら 多村拳秀

安政御造営時に担当した障壁画の一覧

絵師名	御殿名	部屋名	画題	枚数
中島来章	御常御殿	御小座敷上の間	和歌之意	18面
	御常御殿	御小座敷上の間	なくうぐいす 花に鳴鶯	4面(小襖)
	御常御殿	御小座敷上の間	すむかえる 水に住蛙	2面(小襖)
	御常御殿	南廂	たのうえのかり 田上雁	2面
	御常御殿	南廂東方	なみのうえのつる 波上鶴	2面
	御花御殿	上の間	群鶴松梅	15面
多村拳秀	御涼所	上の間	志賀春の景	34面
	御涼所	上の間	小鳥	4面(小襖)
	御涼所	上の間	ゆうぎよみずくさ 遊魚水草	2面(小襖)
	若宮御殿	二の間	梅に鶴	16面

※主要な人物のみ抜粋

鶴は七福神の一人に数えられる福祿寿が従えたとされています。千年生きるとされ長寿を表す瑞鳥として扱われ、万年生きるとされる亀と共に長寿の象徴として画題にも取り上げられます。京都御所の障壁画にも様々な絵師が様々な画題で鶴を画いています。

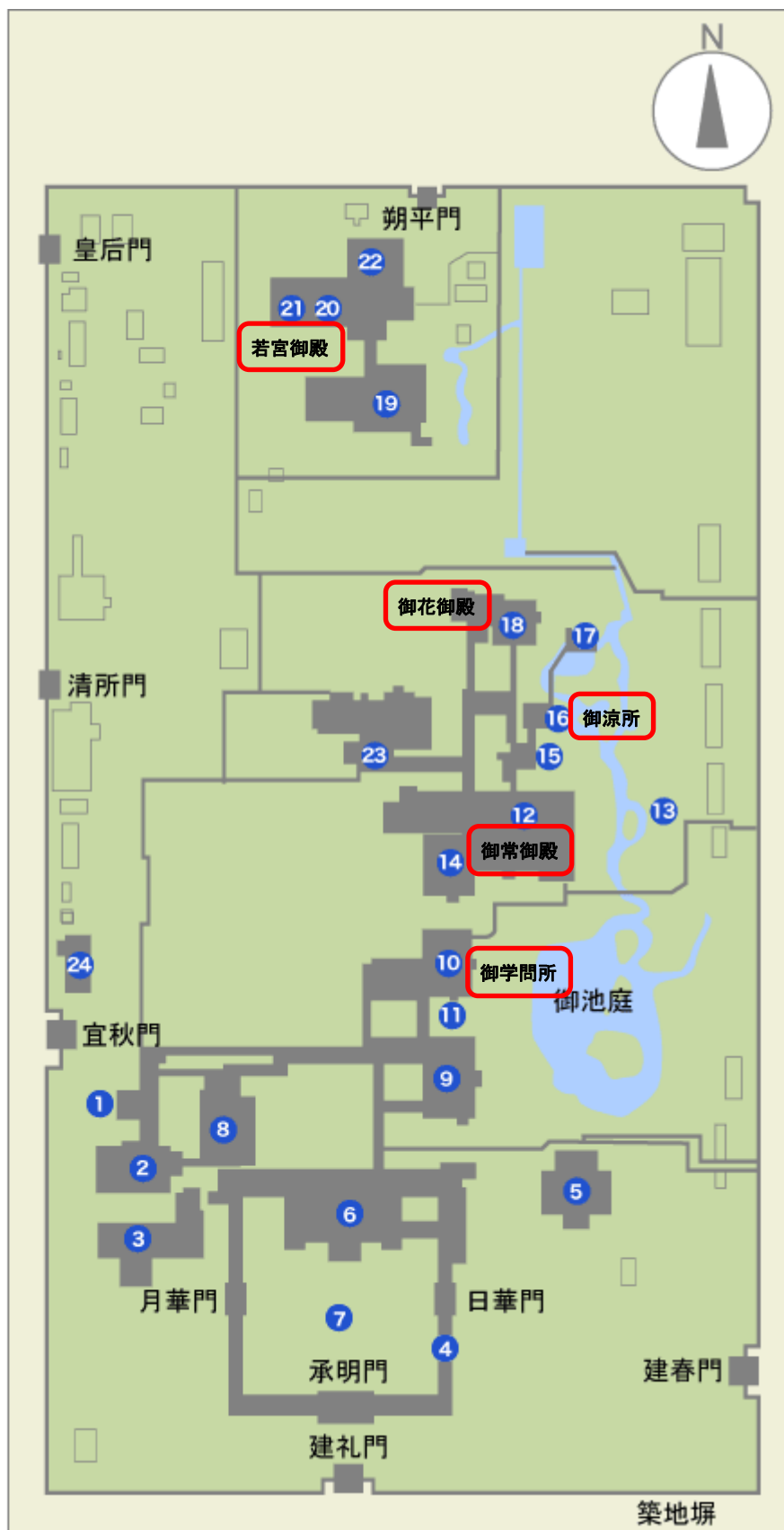


しよだいぶ
諸大夫の間「鶴」狩野永岳筆(葉其の一で紹介)



京都御所案内図

- ① 御車寄
- ② 諸大夫の間
- ③ 新御車寄
- ④ 回廊
- ⑤ 春興殿
- ⑥ 紫宸殿
- ⑦ 南庭
- ⑧ 清涼殿
- ⑨ 小御所
- ⑩ 御学問所
- ⑪ 蹴鞠の庭
- ⑫ 御常御殿
- ⑬ 御内庭
- ⑭ 御三間
- ⑮ 迎春
- ⑯ 御涼所
- ⑰ 聴雪
- ⑱ 御花御殿
- ⑲ 皇后宮常御殿
- ⑳ 若宮御殿
- ㉑ 姫宮御殿
- ㉒ 飛香舎
- ㉓ 参内殿
- ㉔ 参観者休所



観マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

通マークは、申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。

詳細は、<http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html> をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>
 〒602-8611 京都市上京区京都御苑3 宮内庁京都事務所
 代表電話：075-211-1211 参観係直通電話：075-211-1215